

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開2002-294774

(P2002-294774A)

(43)公開日 平成14年10月9日(2002.10.9)

(51)Int.Cl.

E 03 C 1/02

1/042

F 16 L 5/00

識別記号

F I

マーク(参考)

E 03 C 1/02

2 D 0 6 0

1/042

E

F 16 L 5/00

S

審査請求 未請求 請求項の数1 OL (全4頁)

(21)出願番号

特願2001-99424(P2001-99424)

(22)出願日

平成13年3月30日(2001.3.30)

(71)出願人 000002174

積水化学工業株式会社

大阪府大阪市北区西天満2丁目4番4号

(71)出願人 591183566

セキスイ管材テクニックス株式会社

滋賀県栗太郡栗東町大字野尻75番地

(72)発明者 吉川 秀世

大阪市北区西天満2-4-4 セキスイ管

材テクニックス株式会社内

(74)代理人 100102956

弁理士 九十九 高秋

最終頁に続く

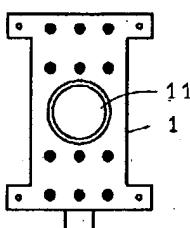
(54)【発明の名称】 さや管工法用水栓ボックス

(57)【要約】

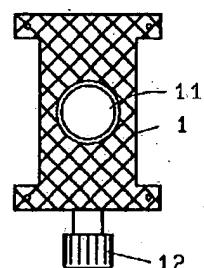
【課題】 コンクリート壁からの埋設深さが小さい水栓ボックスにおいても、通常のモルタル等を用いて補修が可能で、かつ補修後に硬化したモルタル等のひび割れや落下の恐れが少ないさや管工法用水栓ボックスを提供する。

【解決手段】 水栓ボックスの水栓取り付け側外表面が、柱状突起物を突設されている、網目状の凹凸形状とされている、珪砂を固着されている等で粗面化されている。

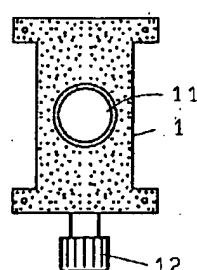
(a)



(b)



(c)



が水栓ボックス1内を通過してその側方に突出され、その先に水栓4が取り付けられる。

【0014】水栓ボックス1の給水管突出部11側の外表面は、粗面化されている。粗面化の目的は、モルタル等で通常のモルタル等を用いて補修された際に硬化したモルタル等を水栓ボックス1外表面に強固に固着させるためである。

【0015】粗面化の方法としては、前記粗面化の目的を達成できるものなら特に限定されず、例えば一例として、水栓ボックス1の外表面が、柱状突起物を突設されて粗面化されている、網目状の凹凸形状とされて粗面化されている、又は珪砂を固着されて粗面化されている等、適宜状況に応じて選択されれば良い。それらのパターンの一例として、例えば、図1(a)のように表面に柱状突起物を突設されているもの、図1(b)のように網目状の凹凸形状とされているもの、または図1(c)のように珪砂を固着されているもの等が好適に適用される。

【0016】表面に柱状突起物を突設されている場合(図1(a))は、補修に用いられるモルタル等のスランプが多少高くて、モルタル中に気泡が残留しても硬化したモルタル等が割れることが少ない。

【0017】柱状突起物は、水栓ボックス1表面が突起形状とされたものであっても、別に柱状物を表面に固定しても良いが、柱状物を固定する場合は、実質上一体と見なされるように強固に固定されなければならぬ。

【0018】網目状の凹凸形状とされている場合(図1(b))は、モルタル等に使用される珪砂の粒度が多少不揃いであっても、アンカー効果によりモルタル等は、水栓ボックス1外表面に固着する。

【0019】網目状の凹凸形状は、水栓ボックス1表面が凹凸状に成型されていても、別に金網等の凹凸状の成型物を準備してこれを水栓ボックス1の表面に固定しても良い。

【0020】珪砂を固着されている場合(図1(c))は、粗面の凹凸が平均化するのでアンカーラーが水栓ボックス1外表面のどの箇所も一定し、モルタルの固着が不均一にならず、水栓ボックス1外表面に密着する。

【0021】砂を水栓ボックス1表面に固定するには、例えば、ポリウレタン系、エポキシ樹脂系等接着剤を水栓ボックス1表面に塗布し、接着剤が未硬化の状態でその上に珪砂を散布し、接着剤が硬化後余分な珪砂を取り除くことで得られる。

【0022】図2は、本発明の水栓ボックス1を用いて給水配管を行った一例の側面図である。コンクリート壁

Wには予め水栓ボックス1が収納される空洞が設けられ、水栓ボックス1は、捻子(図示せず)等で、空洞内のコンクリート面に固定されている。コンクリート壁W内に埋設されたさや管3は、水栓ボックス1のさや管接続部12に接続されている。給水管2はさや管3から水栓ボックス1内を通り、給水管突出部11から突出しており、この先端部に水栓4が接続されている。

【0023】水栓ボックス1の給水管突出部11側の外表面と、水栓4との間は、補修用モルタル5が充填され、その表面はコンクリート壁Wの表面と面一とされ、更にその表面に例えば壁紙やタイル等の表面仕上げ材T等が貼り付けられて水栓4が固定されている。

【0024】補修用モルタル5の厚さは、建築物の設計によっては10mm程度となってしまう場合があるが、通常の、例えばポルトランドセメント等一般に用いられるセメントを用いて補修しても、水栓ボックス1の外表面が粗面化されているので充分なアンカーラー効果があり、硬化後にモルタル5がひび割れしたり落下したりする恐れが少ない。

【0025】

【発明の効果】上記の通りであるから、本発明のさや管工法用水栓ボックスは、通常のモルタル等を用いて補修が可能で、かつ補修後に硬化したモルタル等のひび割れや落下の恐れが少ないさや管工法用水栓ボックスとなるのである。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明のさや管工法用水栓ボックスの一例の給水管突出側正面図である。

(a) 粗面化のパターンが、表面に柱状突起物を突設されているものの一例である。

(b) 粗面化のパターンが、表面が網目状の凹凸形状とされているものの一例である。

(c) 粗面化のパターンが、表面に珪砂を固着しているものの一例である。

【図2】本発明の水栓ボックスを用いた給水配管の一例の一部断面図である。

【符号の説明】

1 水栓ボックス

11 給水管突出部

12 さや管接続部

2 給水管

3 さや管

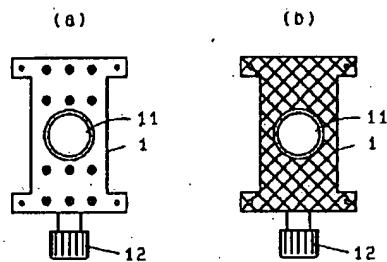
4 水栓

5 補修用モルタル

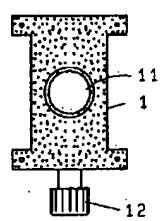
W コンクリート壁

T 表面仕上げ材

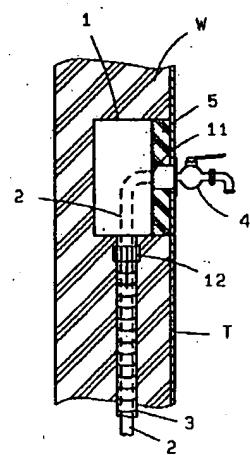
【図1】



(c)



【図2】



フロントページの続き

Fターム(参考) 2D060 AC05 BF01